令和３年度 図画工作部会研究計画

１ 研究主題

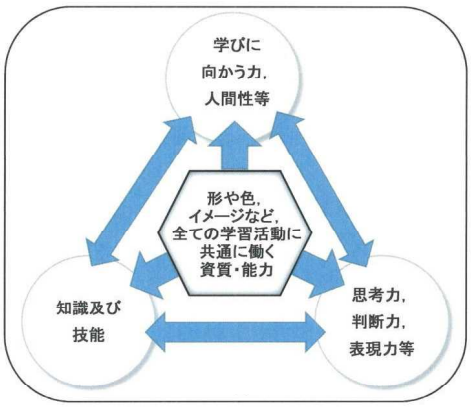
豊かにかかわり つながり 自らつくりだす造形活動

－造形的な資質・能力を高め，表現する喜びが互いに感じられる授業づくり－

２ 研究主題設定にあたって

図画工作科は，自由に想像を広げることができる楽しさや，思いのままに描いたりつくったりすることの面白さといった，よりよい表現を求めて試行錯誤することを通して，自分らしく創造していくことのできる教科である。表現されたものを鑑賞する際には，感じ取る楽しさに気付き，その形や色，イメージのよさや美しさを味わうこともできる。これらの図画工作科の学びのよさは，自分と対象とのかかわりを深め，自分にとっての新しい意味や価値をつくりだし，生涯にわたって学び続ける基礎となると考える。

図画工作部会では，これまで実践してきた取組の成果を生かしつつ，新学習指導要領で示されている「三つの資質・能力（図１）」の側面から，図画工作科の指導内容を整理し，「主体的・対話的で深い学び」の趣旨を踏まえた授業改善を行い，図画工作科で身に付けさせたい資質や能力の育成に努めたいと考え取り組んできた。



〈図1 三つの資質・能力〉

その取組の中で，「豊かにかかわり　つながり　自らつくりだす造形活動」の研究主題を設定し，ものをつくる活動における学びの過程を見直し，指導方法の工夫・改善を行ってきた。児童は，材料とであった瞬間から，自分の思いをどう表現しようかと考える。表現活動では，児童同士や教師，そして自分自身との対話により，作品を見つめ直し，「つくり，つくりかえ，つくる」ことを行っている。鑑賞では，自他の作品のよさに目を向け，試みのよさを感じ取ることを通し，自分の見方や感じ方を深めている。これまでこれらの児童の姿を具現化するための授業を研究し，児童の実態に応じた「表現内容」，「表現材料」，「表現方法」と豊かにかかわらせることで，児童が表現したい思いを明確にし，その思いを実現しようと主体的に取り組むことのできる授業づくりを行ってきた。その中で，教師は，児童が材料と向き合い，創造的な技能を十分に発揮して表現し，達成感を味わうための支援の方法を模索してきた。そして，本研究主題が図画工作科における本質にせまるテーマであることが確認された。

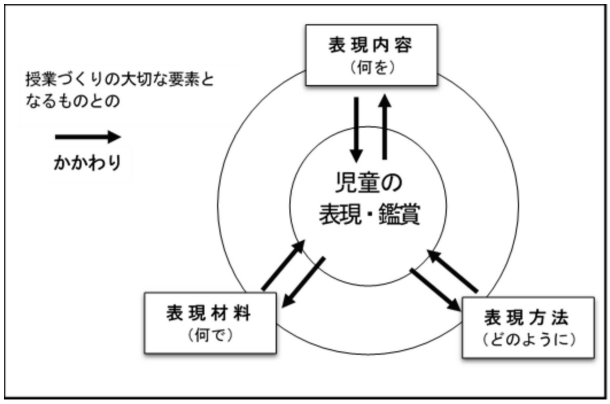
令和２年度は，研究主題の「豊かにかかわり　つながり　自らつくりだす造形活動」を解明するために，副主題として「学びを生かし，表現する喜びが共に感じられる授業づくり」と掲げ，研究を推進してきた。新学習指導要領の趣旨を踏まえた上で，カリキュラム・マネジメントの推進，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を図ることを目指した実践的な研究に取り組んできた。その結果，自分の感性を働かせながら，納得のいくまで作品と向き合うことを通し，つくりだす喜びを味わう児童が増えてきた。しかし，課題として，自分の思いや願いを，表現する喜びにつなげるために，どのように表現するかを発想・構想する能力，イメージを作品にするために材料や用具を選択し，表し方を工夫する知識・技能といった，基礎的・基本的な造形的な資質・能力を高めていく，授業づくりのためのより実践的な研究を行う必要性を強く感じた。そして，児童がつくりだす形や色，作品にこめられた思いなどのもつよさを，互いに感じ合い，伝え合う授業づくりを行うことで，より豊かな造形活動が展開されるのではないかと考えた。そこで今年度は，研究主題を「豊かにかかわり　つながり　自らつくりだす造形活動」，副主題を「造形的な資質・能力を高め，表現する喜びが互いに感じられる授業づくり」とし，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を通して，つくりだす喜びを味わうとともに，感性を育み，楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い，豊かな情操を培うことを目指し，本主題を設定することとした。

３ 研究主題についての考え方

（１）「豊かにかかわり」とは

これまで図画工作部会では造形活動において，「表現内容」（何を），「表現材料」（何で），「表現方法」（どのように）の３つの要素を明確にした授業づくりに取り組んできた。（図 2）

表現活動では，児童が３つの要素をしっかりとつかみ，主体的な学びの実現を図ることにより，自らつくりだす活動が促されると考える。自分の表したいことが決まっている児童は，３つの要素を関連付けながら，主体的に製作に取り組んでいく。鑑賞活動では，３つの要素を基に友達の作品や親しみのある作品などを見ることで，自分なりの考えをもったり，感じ取ったりしやすくなる。このようにして感じた思いは，自分の表現活動を広げたり深めたりすることにもつながる。



〈図2　表現や鑑賞における「かかわり」〉

（２）「つながり」とは

児童が夢中になって活動する授業とは，表現したいことを自分で見付け，表現方法を工夫し，試行錯誤を繰り返すことのできるものである。「豊かなかかわり」を通し，自分の考える形や色，イメージが形になる中で，児童は自然と周囲との「つながり」をもち始める。活動中に交わされる教師と児童，また児童同士の対話の中で，児童は「それ，いいね。」や「どうやったの。」などの自分の表現を認めてくれる言葉に自信をもったり，新たなひらめきを得たりして活動に夢中になっていく。また，友達の表現から，「ああいう表現もあるのか。じゃあ，こうしたらどうだろう。」と，刺激を受け，自分なりの意味や価値を見い出すことが，新しい発想を生み出すことにもなる。時に，異学年集団で活動したり，作品を校内外に展示する機会を設けたりするなどのつながりも，児童の発想や構想の能力を高める場面となる。「つながり」で得られる共感や賞賛の言葉から，児童は表現することの喜びを実感することができるのである。

身近な「ひと」，「もの」，「こと」と自分がつながる場面を設けることは，「思った通りにできた。」「思いをうまく伝えられた。」という達成感をもたせ，「自分の表現に自信がもてた。」といった自己肯定感を高める。また，「見てもらいたい」，「喜んでもらいたい」といった思いをもつことは，よりよいものをつくろうとする意欲の高まりにつながる。さらに，達成感や表現の喜び，自己肯定感が，自他の造形活動について「話したい」，「聴きたい」，「伝え合いたい」などの意欲となり，言語活動の充実へとつながっていく。このように，学ぶ喜びを実感し，「つながり」を深めていくようにすることで，主体的に表現や鑑賞の活動へ取り組む意欲を生む。そしてそれが次の活動へと結び付いていく。

（３）「自らつくりだす」とは

図画工作科では，深い学びにつながる「見方・考え方」を「造形的な見方・考え方」と捉えている。「造形的な見方・考え方」とは，「感性や創造力を働かせて，対象や事象を，形や色などの造形的な視点で捉え，自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと」であり，ここに教科の本質がある。

これを受け，「自らつくりだす」とは，表現及び鑑賞の活動において，児童が材料や作品，家庭や地域でであう形や色などを造形的な視点で捉え，感じたことを基に自ら働きかけ，イメージをもちながら自分で新たな意味や価値をつくりだす創造的な活動のことである。作品は自分にとっての大切なものとなり，見る人に感動を与える存在にもなる。また，その製作過程において，自分の表現へのこだわりや作品への思い入れが強まることなども，新たな意味や価値をつくりだした場面といえる。「表現内容」，「表現材料」，「表現方法」の３つの要素と豊かにかかわり，「ひと」，「もの」，「こと」とつながりながら，自らが思考・判断し，自己決定をすることで，自分にとっての新しい

意味や価値をつくりだすことができるのである。

（４）「造形的な資質・能力を高め，表現する喜びが互いに感じられる授業づくり」とは

図画工作科における深い学びを実現させるためには，児童が「造形的な見方・考え方」を十分に働かせ，表現及び鑑賞に関する造形的な資質・能力を高めていくことが大切である。そのためには，表現と鑑賞の一体化を図った学習を充実させていく。

造形的な資質・能力を高めるためには，表現及び鑑賞の活動を通して，「知識及び技能」「思考・判断・表現力等」「学びに向かう力，人間性等」を，相互に関連させながらバランスよく育成していかなければならない。そして，「造形的な見方・考え方」を働かせ，生活や社会の中の形や色などと豊かにかかわることができるようにしていく。

授業を構想するにあたっては，児童の実態に応じた創意工夫のある計画的かつ継続的な年間指導計画を作成する必要がある。児童にどのような資質・能力を育成するかを考え，ねらいを位置付けけ，授業を展開していくのかということが大切である。児童は，表現する喜びを互いに感じることのできる学びの場面や，共に表現している友達などから影響を受ける。そして，新たな表現の深まりが生まれる場面などが，「造形的な見方・考え方」を広げ深め，表現する喜びを互いに感じることのできる学びにつながると考える。

図画工作科の「つくり，つくりかえ，つくる」学びの過程は，ＲＰＤＣＡサイクルで回る。児童の実態・先行経験（Ｒ）⇒育成を目指す資質・能力を獲得する題材設定（Ｐ）⇒創造的な技能を生かした表現活動（Ｄ）⇒表現活動の振り返り・表現及び鑑賞の一体化（Ｃ）⇒新たな表現活動（Ａ）となる。指導の在り方を常に確認し，児童一人一人が表現する喜びを感じることができるようにするため，教師は児童の表現や活動をしっかりと見取り，表現欲求に応えるべく個に応じた指導や，次の表現につながる適切な評価を行うことが求められる。

４ 研究内容

図画工作科における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善のために，次のことを研究していく。

（１）育成する造形的な資質・能力を明確にした指導計画の工夫

児童に育成する資質・能力を明確にし，これまでの経験を生かしながら資質・能力を向上させ，「造形的な見方・考え方」を働かせることができるような題材を選択・配列し，適正な評価を考慮した題材の指導計画を作成する。その際，児童の学習意欲を高めるために発達段階に応じて，系統性を踏まえた学びが展開できるよう工夫する。また，地域の実情や各教科等との関連を意識した題材の設定を行うことも大切である。

指導計画の作成の際には，「Ａ表現（１）ア，イ」と「Ａ表現（２）ア，イ」，また「Ｂ鑑賞（１）ア」のバランスや「〔共通事項〕（１）ア，イ」の視点から題材の指導計画や内容，方法を検討し，目標の設定や具体的な指導と評価を考えることにも留意していきたい。また，ＲＰＤＣＡサイクルを意識し，題材を扱う順序や幅のある配当時数の増減などを工夫し，成果や課題を次の実践に着実に生かしていくことができるようにする。

（２）「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

①「主体的・対話的で深い学び」の充実

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善とは，表現及び鑑賞の活動を通して，児童一人一人が「造形的な見方・考え方」を働かせながら，造形的な資質・能力を相互に関連させた学習展開を図ることである。教師は児童の表現欲求に応える，必然性のある題材を設定することや，学習の見通しを立てられるようにするなど，児童自らが表現や鑑賞の活動に取り組むことができるような授業づくりを目指す必要がある。例えば，表現では，表現内容から表現材料を児童が探し集めるように働きかけることも，児童の造形的な資質・能力を高めることになる。そし

て，収集した材料を活用する題材や，児童が思う存分に造形活動に取り組める場所を設定する。これらのことから，児童が主体的に表現活動に取り組もうとする意欲が高まるとともに，造形活動の充実が期待できる。また鑑賞では，普段よく目にしている形や色のよさや美しさを再認識する具体的な方法を考え，「造形的な見方・考え方」をもつことができるような授業改善を図ることで，主体的な活動になる。児童は能動的に「つくり，つくりかえ，つくる」という学習過程を通し，豊かに発想・構想したことを，系統的に身に付けた技能を発揮し，新たな発想を得る中で，自分のイメージを作品として表現していく。この繰り返しの中から，深い学びを体得することとなる。

「造形的な見方・考え方」ができるようにするためには，授業の中に話し合うなどの対話を位置付けることも大切である。その際，形や色などの造形的な視点から，自分の考えなどを広げたり深めたりできるよう留意する。「この形や色でいいか」，「自分の表したいことは表せているか」など自分の行為や活動を振り返り，感じたり，考えたりする場面（自己内対話）を大切にする。そして，互いの活動や作品を見せ合いながら，感じたことや思ったこと，考えたことなどを，話し合ったり伝え合ったりする場面から，言語活動が充実していくと考えられる。これらの活動から，「つくり，つくりかえ，つくる」学習過程を見通し，児童が自分の成長やよさに気付くことができるように，振り返りの場面を設けることで，深い学びが展開されるようになる。さらに，教師との対話，児童同士の対話だけでなく，保護者をはじめとする様々な人と活動を交流する機会を設定することができれば，児童はより表現内容への新たな意味や価値をつくりだしていくことが可能であると考える。

②造形遊びの充実

造形遊びは，児童が材料などに進んで働きかけ，自分の感覚や行為を通して捉えた形や色などから発想や構想を繰り返し，思いのままに技能を働かせて表現する活動である。造形遊びは，児童が表現する過程そのものを楽しむ中で「つくり，つくりかえ，つくる」という学びの過程を経験できる重要な活動である。友達とかかわり合いながら活動することが主になるため，主体的・対話的な学びが展開しやすいだけでなく，既習の経験や技能を生かして，新しい試みや価値を生み出すことができるので，深い学びにつなげていくこともできる。今一度，造形遊びの価値を確認し，どの学年でもそれぞれの発達の特性に応じた授業を実施することが大切である。

（３）造形的な資質・能力の育成と，指導に生きる評価の工夫

学習評価では，児童の学習状況を的確に捉え，自らの学びを振り返り，次の学びに向かうことができるようにするとともに，教師が指導の改善を図ることにつなげることが重要である。図画工作科においては，完成された作品だけでなく，児童一人一人が表現及び鑑賞活動の一連の学習過程の中で，育成を目指す資質・能力をいかに発揮しているのかを適切に評価することが求められる。共感したり支援したりすることを通して，造形活動への意欲，資質や能力を高める指導につなげていくことが重要である。活動中の姿を評価することは，児童の表現の意図を理解することにつながり，指導（支援）する際の手がかりとなる。教師は，指導と評価が常に一体となっていることを認識しておくことが大切である。

また，児童自らが学びを振り返り，次の学びへ向かうことができるよう，自他の作品や取組・行為のよさについて記述したり，話し合ったりする自己評価や相互評価などを行う場を設定することも大切である。教科の特性として，個々の活動が多様かつ同時進行していくため，ポートフォリオ，デジタル記録やワークシートの活用など，多様な評価方法を組み合せることで，指導改善，学習改善につなげる評価を行う必要がある。児童のよさを認め，表現及び鑑賞の活動への自信と楽しさ，喜びを味わわせ，更なる表現活動への意欲をもたせるなど，指導に生きる評価方法を工夫していくことが大切である。

５ 研究方法

（１） 本年度は研究大会の会場校である小松島市児安小学校を中心とした研究組織をつくり研究計画を立てる。また，発表担当の各郡市の研究組織と協働しながら事前研究や授業実践を行い研究内容の解明を図る。

小松島市児安小学校では，３公開授業を実施する。

【部会別テーマ】

造形遊びをする活動部会	○ 造形遊びをする活動を通して，活動を工夫してつくることができるようにするにはどうすればよいか。「知識及び技能」 ○ 造形遊びをする活動を通して，造形的な活動を思い付くことや，活動の仕方について考えることができるようにするにはどうすればよいか。「思考力，判断力，表現力等」
絵や立体，工作に表す活動部会	○ 絵や立体，工作に表す活動を通して，表し方を工夫することができるようにするにはどうすればよいか。「知識及び技能」 ○ 絵や立体，工作に表す活動を通して，表したいことを見付けることや，表し方について考えることができるようにするにはどうすればよいか。「思考力，判断力，表現力等」
鑑賞活動部会	○ 鑑賞をする活動を通して，造形的な魅力や造形的な表現の内容，方法，意図や特徴，表し方の変化などについて感じ取ったり考えたりし，自分の見方や感じ方を広げたり深めたりするにはどうすればよいか。「知識」「思考力，判断力，表現力等」

※上記に加えて，〔共通事項〕（１）は，すべての部会に関連付ける必要がある。

（２） 各郡市研究会は，研究主題の解明に向けて共通理解を図り，研究や授業実践を行う。

（３） 研究成果をまとめ，研究集録（第５８集）を発刊する。

引用・参考文献：

文部科学省「小学校学習指導要領（平成２９年度告示）解説　図画工作編」平成２９年

文部科学省「小学校学習指導要領（平成２９年度告示）解説　総則編」平成２９年

文部科学省　国立教育政策研究所　教育課程研究センター
「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料　令和２年３月

株式会社ぎょうせい『平成29年改訂　小学校教育課程実践講座　図画工作』奥村高明2018年

明治図書『小学校図工　指導スキル大全』岡田京子　2019年

東洋館出版社「初等教育資料2021年1月号・2020年10月号」